

「大腸疾患診断の実際」 全2冊

国立がんセンター病院長 市 川 平三郎 監修
 国立がんセンター病院放射線診断部部長 山 田 達 哉
 国立がんセンター病院放射線診断部医長 牛 尾 恭 輔 著

福岡大学教授

八 尾 恒 良

一見、奇妙な本である。書名が「大腸疾患診断の実際」であるのに内視鏡検査法の記載はなく、疾患の発育経過、自然史が入っている。ましてや「人体の腫瘍」がどうして「診断の実際」に結びつくのか？と思いつつ読みはじめてみると、これが面白い。提示された美しいX線写真、マクロ、ミクロ、内視鏡写真など、これまでの著書の中でも最高のレベルのものであろう。また、豊富な症例が疾病の本質を良く理解させてくれる。そして文章はそれほどうまくないのに、ついつい引きこまれて先を読んでしまう。

どうしてかと考えてみて気がついた。この本はまさに著者そのものである。著者の思考は“診断の実際”にとどまらず、“診断”を通じてみた大腸疾患の本質を問題としているのだ。著者は、長年月消化管のX線診断に従事してきた。そして従来

にない微細なX線診断技術によって見出される微細な所見の解析から疾病の本質に思考をめぐらし、新知見にとどまらず、真理を捉えんとしているのだ。だからこの本では華麗で精緻なX線写真を中心にすえ、これを説明するための道具に内視鏡写真が使われ、マクロ、ミクロが用いられている。そして、その思いが“X線病態生物学”なる新造語を生み出している。このことは、本書の中でも顆粒集簇型病変や大腸癌の深達度診断、発育経過、大腸ポリポシスや cancer family syndrome の項をみれば、非常によく理解できるであろう。

この本には優しさもある。「注腸二重造影法の実際」での記載は、バリウムや空気量、検査上の問題点が実に具体的に記載され、読者への思いやりが感じられる。spasmus との鑑別や読影の実際も実に親切であ

る。

私事にわたるが、著者の牛尾恭輔君は大学の後輩で、大学紛争の最中に九大を卒業した。しかし、“紛争の嵐”のために学内での十分な勉強は許されなかった。彼の貪欲な知識欲は当時学外で行われていた消化器グループに向けられ、やがて現在のがんセンターへと移り、今日の牛尾恭輔が作られた。紛争がなければ“格式ある”研修を終え、“格式ある”研究を志し、消化管の研究に従事しなかった可能性が大であろう。とすれば、彼は大学紛争が生んだ傑作と言えなくもなからう。牛尾君はいつ、どこでも、どんなに酔っても必ずといってよいくらい目を輝かしながら消化管の話をする。飾らず率直で優しい。昨今の東京で20年前の気性を損なわずずっとやっているのも、ひとえに消化管の診断学への情熱のなせるわざかもしれない。

優しさと情熱と、そして実行力と、この本はそんな彼の人格そのものの本だと思う。

□検査法・炎症性疾患・虫垂疾患

●A4版 272頁 図15 写真603
 原色図208 色図5 1988

定価24,720円(税込) 円300

□腫瘍性疾患・消化管ポリポシス

●A4版 310頁 図24 写真627
 原色図308 色図18 1989

定価26,780円(税込) 円300

医学書院 刊